

さんしゃ Zapping

Vol. 30 No. 2 (通巻 178 号)

2015 年 9 月

<産社学会 ニュースレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsumeai.ac.jp

<http://www.ritsumeai.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔目 次〕

<学部創設 50 周年記念①>

産業社会学部創設直後の状況	芝田 徳造	p. 3
Is 50 年おめでとうございます	藤原 壮介	p. 4
創立 50 年の断想	須田 稔	p. 6
産社創設 50 周年に寄せて 産社精神と天安門事件抗議声明の思い出	松田 浩	p. 8
学部創立 30 周年事業と テレフォン・カード〈時代開拓〉のこと	佐藤 嘉一	p. 10
回想ー学部 30 周年記念事業のことども	佐々木 嬉代三	p. 11
産業社会学部創立 30 周年記念行事 さんしゃデイ特別企画「アジアの文化祭典」	吉田 昌子	p. 13

<学部 50 周年事業>

学術企画実施予定紹介		p. 16
------------	--	-------

学部創設 50 周年記念特集号の発行にあたって

2015 年度は、産業社会学部創設 50 周年の年度にあたります。そこで「さんしゃ Zapping」では、夏号（178 号）および秋号（179 号）のテーマとして、『産社創立 50 年を振り返って—あの頃の産社・現役の教職員の皆さんへのメッセージ—』（仮称）を計画いたしました。

産業社会学部の歴史を築き上げてこられ、既に退職された先生方に、先生方が取り組んでこられた活動などについてのご紹介と、併せて現役の教職員へのメッセージをご執筆いただきました。

先生方が取り組んでこられた学部づくりへの思いと営みとを、現職の教職員が共有させていただき、今後の学部づくりへの契機となれば、この特集の意義も大変大きいかと存じます。

〈学部創設 50 周年記念①〉

産業社会学部創設直後の状況

名誉教授・元学部長 芝田 徳造



〈創設の時期・学舎・学部理念等〉

産業社会学部は1965年4月、広小路学舎の恒心館(元経営学部棟・現世界救世会館)を基本棟として入学定員300名で発足しました。初代学部長は細野武男教授・学部主事は池井望教授・学生主事に奥田修三教授があたられ、①高度成長期真っただ中の現代産業社会の諸現象・諸問題を社会科学的方法で解明すること ②社会学の方法にもとづき調査・統計を駆使する実証的な学問を行なうこと ③社会科学と連携して学問の総合性を確保すること(文部省への申請書より)を目指す学部として発足しました。つまり従来の社会学部が文系に位置づけられたのに対して、産業社会学部は社会科学系の新しいタイプの学部としての出発でした。

専任教員も初年度は学内からの移籍10名・学外からの招聘8名、翌年度更に学外から6名・学内から1名、完成年次の教員組織を揃える創設3年目には学外からの2名を加え、総勢27名の陣容となりました。いずれも新進気鋭の研究者が揃い、厳しい議論のもとに教育内容も検討され、新しい学部づくりも着々と進んでいきました。

〈学園紛争の影響〉

ところが、そのころ世界的に蔓延していた大学紛争がわが国にも波及し、まず関東に始まり全国へと広がりました。そしてわが学園でも1968年秋の「新聞社事件」「寮問題」を契機として始まりました。そして全共闘による大学本部(中川会館)の封鎖、大学幹部のつるし上げ、学園施設の破壊、それに対する学生の抗議活動等が延々に行われ、広小路学舎は連日大混乱が続きました。筆者は同年4月保健体育教員として就任し、広小路学舎に近い体育館に勤務していましたので、その状況を直接目撃する立場にありました。

そして1969年2月26日、全共闘により恒心館の封鎖・破壊が始まったのです。全共闘の行動は乱暴の限りで、教室の破壊・教員の研究室への侵入と破壊や学生の拉致・暴行を行いました。したがって正常な教育活動が行える状況ではありませんでした。同年5

月20日、恒心館内の小火の調査を口実として京都府警機動隊による強制捜査が行なわれ、全共闘は恒心館から排除されました。排除された全共闘と支援の他大学生二百数十名は、集団となって広小路キャンパスに殺到し、正門・西門をバリケード封鎖、清心館・存心館等の机等を破壊、これを資材としてバリケードを強化し、研心館を攻撃しました。

さらに午前11時過ぎ全共闘の一部の学生が、「わだつみ像」にロープをかけて引き倒したうえ、鉄のハンマーでその頭部を破壊しました。筆者はその前日から「わだつみ像」の前にある図書館2階で徹夜の警戒に当たっていましたので、「わだつみ像」への暴行

は偶然にも目撃することになりました。

<衣笠キャンパスへの緊急移動>

全共闘による恒心館の封鎖と破壊により、産業社会学部は、教育・研究を継続することが困難となり、また全学部の衣笠一拠点構想も検討されていた時期でもあり、1970年4月から学部は衣笠に移転し、しばらくはブレハブ校舎で授業が行われていました。そして同年12月、付属図書館西隣に産業社会学部基本棟「学而館」が竣工したのです。このような困難な時期を経て、またその後の学部教職員の粉骨砕身とも言える努力の結果、今日の素晴らしい産業社会学部が形成されたのです。

Is50年 おめでとうございます

名誉教授 藤原 壮介

1 「大学紛争」

私が産社に着任したのは1969年4月。大学紛争の最中でした。研究室へ荷物を送ろうとして電話したら、「恒心館が全共闘に占拠されている。待ってくれ。」という返事でした。それでも大島事務長（当時）が下宿も荷物を預かる所も準備して下さったというので、大した心配もなく単身赴任で京都に着きました。

しかし現実の産社は教室も仮住まいで、授業中「ピッ、ピッ、ピッ、」と笛の音が聞こえると授業を中断して、ゲバ棒の集団に捕

まらないように校舎外に逃れるという状態で、まともな授業にはならない有様でした。夜には宿直警備もありました。他学部の先生方とお近づきになり、異なる学問体系について知り、研究課題とするところをお聞きして、「さすが立命館」と感心したこともありました。耳学問です。しかし5月の宿直明けの朝、ヘルメットとゲバ棒で武装した一団の襲撃があり、「わだつみ像」が台座から引きずり落とされ破壊される現場を、図書館の2階から見なければならなかったのは、強い怒りと深い悲しみを伴う出来事でした。



2 「現・総・共」の困難と試行錯誤

学部棟恒心館はやがて解放されましたが内部の破壊はすさまじく、産業社会学部は1970年4月から衣笠に移転することになりました。「産社30年誌」は、「衣笠移転とともに、新しい教学創造の熱気が学部を満たした。」と述べています。最初の実態はプレハブ教室、研究室は大部屋を仕切った仮住まいでしたが、ようやく新しい大学教育（立命館では「教学」と言いました）を作る出発点に立ったことで、張りきっていました。

産業社会学部の教学理念は設立までの全学討議を通して、「現代化・総合化・共同化」（「現・総・共」）とされ、「現・総・共」は学部の存在意義にかかわるものでしたが、学部はようやく最初の卒業生を送り出したばかりで「大学紛争」に見舞われ、紛争終結時点では中堅メンバーの退職・転任も多く、私達「新来」は「現・総・共」の理念と経験を一から学びなおして産社教学を作り上げる実践に取り組まなければなりませんでした。全学でも、学部でも、理念に即した教学実践と課題を連ねた『総括文書』が次々に出されて、

それを読み解くだけでも大変でした。

しかし、産社の学生諸君は自立心に富み、積極的でした。一回生小集団教育プロゼミでは、学生の意見、協力を基に様々な実践・実験が行われました。若い学生諸君と議論しながら授業を進めることは、教員として楽しいことでした。しかし教員が主として責任を負わなければならない専門科目については、一科目で産社らしい内容の確立は困難でした。多様な学科目が設置され、多彩な先生方が学部教員としておいでになりました。研究合宿もよく行われました。合宿は学問的交流の時間であるとともに、産社教学に立ち向かう教員の親睦交流の機会でした。そうした中から難しい困難な課題を抱えながらも、お互いの信頼が作られていきました。

3 発展・拡大の光と影

幸いに産社への入学志望者は多く、時代はこれまでの学問分野だけでは解明できない複雑な社会的諸問題を次々に生み出していました。『国民的要望』に応えるためにも学部は多彩なカリキュラムを設定し、多様な専門分野の教員を陣容に加えていくことになります。その多様性は当初部門制と必修科目によってまとめられ、次いで「望ましい履修体系」の指導を経て、1987年度4コース制の発足となりました。コース制と1972年の大学院設立（社会学研究応用社会学専攻）と合いまって、その後の産社教学の発展の原型が作り上げられたように思います。

私的な思い出としては、1984年研究委員会委員長の席についたことがあります。「ニュース・レター」の発刊は奥川桜豊彦先生のアイデアをお借りして企画され、「産業社会論集」のA4版、定期化は深井純一先生（故

人)の推進力に依存する点が大きかったと思います。

しかし発展が光だけでなかったことは残念です。学部教学の発展は立命館大学の全学的な「飛躍」と深くかかわり、何時の頃からか学部の中でも【中川会館の意向】がささやかれるようになっていました。ある語学の先生が個人で文部省の係官を訪ねたことから、大学の申請内容に不利な提訴に行ったらしいと言われ、学部主事が処分の提起のために経過と内容を審問しなければならなかったことがありました。ある先生は学部運営を巡る些細な口論から別れ際に拳で一突きをし、それが「立命館に許されない『暴力行為』」としてあたかも傷害事件か何かのように大きな事件とみなされ、ご当人はやがて立命館を去っていきました。衣笠移転のころの清新

で自由闊達な共同の気風は失われていった感じがありました。

4 真田先生の学位審査

真田是先生の学位審査(論文博士)を学部から委嘱されたときは緊張しました。真田先生は社会学者としてすでに一家を為し、実践的には関西の福祉運動の太い支柱の一つでした。立命館大学では副学長として全学の「現・総・共」をリードして来た方で、審査は簡単なようにも思われましたが、しかし学部として論文博士の審査は初めてです。安直な審査報告では産業社会学部大学院の鼎の軽重が問われます。何よりも自分自身の「現・総・共」の水準が問われる問題でした。幸いに審査委員の一人に河合幸尾先生(故人)がいて、積極的に意見を出してくださり、おかげで無事大役を果たすことが出来ました。

創立 50 年の断想

名誉教授 須田 稔

①いま所属教員は 90 人と聞いて、魂消るのだ。教授会で議論はできるのか。民主主義的自治を確立できるのか。創立時の専任教員は 18 人。楕円形の大テーブルを囲んで発言は老若とも活発だった。Frontier Spirit だったか。現代化・総合化・共同化の目標はいま、国際化・細分化・分業化に変容しているか。

②志願者は学内入試で 189 人。一般入試で 5701 人。予算定員 660 人を確保するには入

学手続率をどう設定するか、他学部のデータを参照しつつ侃侃諤諤の議論の末、手続者は 941 人、定員の 5 割増しに。新学部への期待が大であったのだろう。1 クラス 70 人を 14 クラス。英語担当非常勤講師の確保は、とりわけ開講 1 ヶ月前とあって四苦八苦だった。70 人クラスで外国語教育というのも、絶望との闘いであった。

③18 人のうち、消息識らぬ 5 人を除くと 12 人が鬼籍に入っておられる。創立時から産社



一筋で定年退職した教員は僕が最後だ。

この4月、中野清一先生が広島大学教授時代に、原爆孤児たちに支援の手をさしのべておられたことを記録しておきたいという社会科教諭と出会い、先生の立命産社での研究教育活動の記録が欲しいと伝えられて、『学部20年小史』にお書きの短文と、ゼミ生だったという卒業生に思い出の記を書いてもらって、その教諭に送付したのだった。中野先生が僕と同じ宇治市にお住まいだったこと、奥さまともども墓地も宇治市にあることを教えられたのは、数年前の『毎日新聞』の広岩近広記者の記事であり、そこに登場した広島大学での教え子で宇治市民の人に案内されてお墓参りもしたのだった。

産社に着任なさったときは広島大学名誉教授だった。孤高の老学者という風格で、4月には未だ33歳5ヶ月で先生の専門分野に無知蒙昧の僕は、雲たなびく高峰を仰ぎ見る思いだった。67年に『同和教育問題』で産社教授会が不当にも差別キャンペーンの元凶だと攻撃されて、これに耐えはね返すのに補導主事として疲労困憊。つづいて学園「紛争」。69年5月から翌年4月まで教職員組合

委員長。中野先生ご退職までの数年間は、僕の疾風怒濤の時代だった。先生の社会活動をお聴きしておくべきだったとの想いが濃い。

④1967年の「同和教育問題」では補導主事であったから疲労困憊その極に達した。残念だったのは、「この問題を教授会で取り上げたとき、発言しなかった教員は退室せよ」と「糾弾集会」で解放同盟が提起すると、専任27人のうち半数近くが退室したのだ。分断戦術と見抜いて全員が動じないでほしいとの僕の期待は潰れた。大学教員はナイーヴなのだ。

⑤69年2月に恒心館が全共闘によって封鎖されるまで、事務室で、あるいは通路で有志学生と徹夜で警護したこともあった。封鎖解除に決起した自治会学生を頼もしく仰ぎ見たっけ。「絶命館大学残業社会学部」と呼ぶ揶揄もあったが、平和と民主主義の教学理念の実践に意気高かった。

⑥小保方コピペ問題はいまなおミステリアスだが、僕がゼミを担当していた時期だから93～96年度中のことだ。父母教育後援会が優秀なレポート執筆学生を表彰した。決定後、偶然それが、僕のゼミのテーマ「芸術文化と市民・企業・行政」と関わるものであったから読んでみた。冒頭から5分の1ほど読み進めた頃、この考察力・論理立て・筆力に感嘆、同時に、どこかで読んだことがあるぞと、文献に当たった。2冊が見つかった。大部分がこの2冊からの「コピペ」であった。学部主事に伝え、主事は当の女子学生に問い彼女が剽窃を認め、賞を返上した。選考委員会が僕に査読を求めなかったセクト主義を、強く批判すべきだったとの反省がある。

⑦今年2015年3月末、嬉しいことがあつ

た。関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科が、1995年9月に法律文化社から刊行した、人文科学研究所の共同研究の成果『世紀転換期の日本と世界』第5巻『文化の変容と再生』に収録の、ぼくの論文「姓名のローマ字表記、その課題と展望」の一部を入試問題に採用したのだ。刊行以前にNHKの「ナイトジャーナル」に出演した事があり、Minoru Suda 式に SUDA Minoru 式が肩を並べるほどに頻用されるようになってきたことを喜んでいる。

⑧African American Studies で、特に Martin Luther King, Jr. への関心は尽きない。U.S.A の3悪は、racism, materialism, militarism だとした彼の洞察は、今日も正しい。安倍内閣の侵略戦争準備法案が日米同盟の深化の証しで、日本国憲法の立憲主義・平和主義・国民主権に違反するとして、主権者人民の怒りと抗議行動を招いているとき、差別・貧困・抑圧を体制化するアメリカの権力構造に対する闘いが不可避だ。この課題に取り組む研究者が欲しいなあと思う。

産社創設50周年に寄せて

産社精神と天安門事件抗議声明の思い出

元学部長 松田 浩

「六月四日の」流血の日曜日、以来、中国で進行しつつある事態は、国際社会に大きな衝撃を与えている。平和的手段で民主化を求める学生・市民の運動に対し「反革命的暴乱」ときめつけて武力弾圧を加え多数の死者を出した中国政府は、その後も「交通手段・施設破壊罪」「放火罪」等の罪名のもとに事件に関わった労働者をあいついで銃殺刑にする一方、民衆相互の密告をあおり、活動家を執拗に追及、逮捕、投獄するなど、人道上許しがたい暴挙をエスカレートさせている。これらはいずれも、体制の違いを超えて「人権及び基本的自由の普遍的な尊重及び遵守の促進」をめざす『世界人権宣言』の精神を、

真っ向から踏みにじる行為といわなければならない。

私たちは「理性と学問の府」たる大学に身を置く研究者として、事件以来、中国で学者、研究者、知識人に対する政治的、思想的締めつけが急速に進んでいるとの報道にも、深い憂慮を禁じ得ない。現在、日本の大学には数多くの中国人留学生在が学んでいるが、中国公安筋は彼らの動静についても調査を進めているといわれ（六月十七日付『朝日』）、事実、私たちも教え子の留学生からそれについての不安を耳にしている。彼らの人権を今後どう守っていくかは、私たちにとっても大きな関心事である。



私たち立命館大学産業社会学部教授団は、平和と民主主義擁護の本学の教学理念に鑑み、また理性尊重、基本的人権擁護の立場からも、このような民主主義のじゅうりんと乱暴きわまりない人権抑圧に抗議するとともに、中国政府に対してその即時中止を強く要求するものである。」

これは歴史的な中国の「血の天安門事件」(1989年6月)に際して、産業社会学部教授団が出した抗議声明文の全文です。文案は小林幸男先生と私が作成しました。おそらく当時、日本の大学人が発した数少ない抗議声明の一つだったのではないのでしょうか。

私が産業社会学部に教員として籍を置かせていただいたのは、1988年4月から1995年3月定年までの7年間でした。

思い出は尽きませんが、忘れがたいのは、自由と批判精神に満ち溢れた「産社」の気風でした。冒頭の声明文にも、その一端がにじみ出ています。それは何より末川精神の旗手として学部創設を担った先輩教員の先生方から脈々と引き継がれてきたものであり、同時に「産業社会学部」という社会科学を核

とした学部の教学の精神によるものと、私には思われました。長年、権力や資本と熾烈に切り結ぶ形で記者生活を過ごし、ジャーナリスト職能運動を通してメディア研究者に転じた私にとって、平和と民主主義を掲げる立命館大学の、しかも自由と批判精神に溢れた産業社会学部に職を得たことは、まさに解放された自由の天地に身を置く思いがしたものです。学部長時代、川本専務理事が「産社をみれば、立命全体の動向が分かる」とよく洩らしていたことを思い出します。うべなるかな、です。それほど、個性豊かな多数の論客を擁した、批判精神に溢れた骨太な学部でした。

いま私の周囲にも、多くの産社卒業生たちが活躍しています。産社教員のOBとして、うれしくも頼もしい限りです。学部創設50周年を心からお祝い申しあげるとともに、先人たちの培ったこの骨太な学部気風が、これからは絶えることなく引き継がれていくことを願っております。

※ 松田 浩 85歳、メディア研究者。1991年から1期、学部長をつとめる。この8月、日本ジャーナリスト会議(JCJ)から「長年のジャーナリスト・研究者としての功績」に対しJCJ特別賞を贈られた。ちなみに同賞はこれまで家永三郎、吉野源三郎、石川文洋、宮城まり子、むのたけじらの各氏が受賞した権威ある賞。



学部創立 30 周年事業と テレフォン・カード〈時代開拓〉のこと

名誉教授・元学部長 佐藤 嘉一

「産業社会学部創立 30 周年事業のころの思い出話を書いて下さい」と、産社共同研究室からのお電話でした。産社創立 30 年（1995 年）、その頃の“Rits”マークのついた手帳を久し振りに机の引き出しから取り出してみると、例えば記念事業 2 年前のメモです。1993. 6. 8. pm6:00～（中川・4 階）「第四次長期計画フォローアップ委員会」（第一プロジェクト）。同年 6. 10. 1:00pm～「常任理事会」。同日 pm4:30～「第二回学部構想検討委員会」（人間と文化）。同日 pm5:30（スポーツ）。同日 6:00pm「社会福祉課程非常勤講師懇談会」。同年 6. 14. 4:00pm～「五役会議：研究政策・大学院政策」。同年 6. 15. pm1:00～「大学院入試説明会」（産社会議室）；「同挨拶」-研心館 626 号（2 階）。同日 pm5:00「理工学部拡充移転推進委員会」（中川 3 階）。同日 pm7:10pm～「業務協議会」。同年 6. 16. pm4:30～6:30pm「産社 OB を迎えての懇談会」（学面 401）。同日 pm6:30～「フォローアップ委員会」。“Rits”マークの私の手帳には、諸会議開催通知のメモが連綿と書きとめてあります。

この産社手帳（1995）のなかに一枚のテレフォン・カードが挟んでありました。カードの中央には『時代開拓』の四文字



が記され、背景にはこの四文字を背負うかのように二人の宇宙服の飛行士が・・・月面探索している姿が描かれています。・・・

学部創立 30 周年記念品として産社の学生、教職員等に配られたカードです。当時記念事業を中心的に担っておられた佐々木嬉代三さん等が起案したものでしょうか。「現代化・総合化・共同化」という教学理念のもとに創立 30 周年を迎える産業社会学部は、新たに「人間化」課題を掲げて世界に羽ばたこうと元気一杯だったように記憶します。教授会の議論は果てしなく夜遅くまで続き、時には仕出屋から「うどん」が会議室に運ばれたりしました。

「産社」に限らず、立命館大学全体に、否、中高を含む学園全体に制度・組織・構造の一大転換を図ろうという強い意気込みがあったと思います。21 世紀に入っても、立命館

はいよいよ元気に、そして学園の規模も大きくなっている。産社教学の「人間化」課題も、茨木キャンパスの完成でいよいよ順風満帆ということでしょうか。ただちょっとだけ気がかりなのは、上掲の『時代開拓』の図柄です。元気がない。宇宙服の二人の人物はうつむき加減に下を向いてなにか戸惑っているふうなのです。「2011.3.11の福島原発事故」以後の現在では、それに大勢の事故現場に働く人びとの作業着が連想されて複雑な気持ちになります。自然・社会・文化・人間の総合的研究を通して「産業社会」の新たな創造をめざす産業社会学部の精神「現（代化）・総（合化）・共（同化）」は、パソコンの打ち間違いで「幻想境」の文字に化けて打ち出され、「あれー」それはないだろう、と。前進を逆に歩む、「反省」という実践もまた高次

の意味での「前進」ではないか。

産社創立 30 周年記念祝典が「以学館」で華やかに催されてから既に 20 年経過したのですね。手元の法人『役職・教職員名簿』『2000 年（9 月 1 日現在）に目を通すと、学部長の篠田武司先生以下教授 43 人、助教授 19 人、外国語常任講師 6 人、助手 12 人でした。当時の教学刷新の第一線で粉骨砕身ご尽力下さった篠田先生、加藤直樹先生、金井淳二先生、鈴木良先生、辻勝次先生、深井純一先生等が既にこの世を去られている。ご存命であればなあ！と、寂しい限りです。

最後に、大輪の花を咲かせるべく日夜健闘されている、現「産社」教職員の皆さんのご活躍とご健康を心から祈念し、「学部創設 50 周年おめでとう」のお祝いの言葉とさせていただきます。

回想一学部 30 周年記念事業のことども

名誉教授 佐々木 嬉代三

私が産社に赴任したのは 1971 年 1 月 1 日、退任したのは 2005 年 3 月末であるから、足掛け 34 年 3 か月お世話になったことになる。30 代の頃は学部では調査委員会の仕事を中心であったが、77 年 38 歳で書記長の任に就くなど組合活動に熱心であったように思う。40 代になって全学的な仕事、とりわけ 84 年以降調査室関連の仕事に傾注し、情報工学科増設や国際関係学部設立、立命館中高の男女共学化等に努力した。学園全体、貧しかったが夢多き時代でもあった。

50 代の後半以降は全学役職に忙しく、教授会にも出られず学部とは次第に疎遠になっていった。ただ 50 代前半には人文研の専任研究員や教育科学研究所の所長など、研究と教育を掘下げて考える時期があり、その過程で学園創立 90 周年記念の国際シンポや学部創設 30 周年記念事業に取組んだことは、貴重な体験として想い起される。どちらも事務局長の資格で参加したので、成功も失敗も我が肩にかかることばかり真剣であった。

学部 30 周年記念事業に関しては、当時学

部長であった佐藤嘉一さん、特別企画「アジアの文化祭典」の企画責任者であった吉田昌子さんから既に詳しく語られていると思うので、ここでは事務局長として忘れてはならないことを記しておく。第 1 に学園から 1,000 万円という巨額の援助があった。学部企画への援助としては例外的に巨額だが、産社 20 周年時に生み出されたばかりの産社校友会が、30 周年に産社奨学金を作ろうとしていることへの、ご褒美ともいうべき内容が込められていた。第 2 に記念講演「映画と講演の夕べ」で、当時爆発的に人気のあった「月はどっちに出ている？」を上映し、崔洋一監督のお話を伺ったのだが、この企画には朝日シネマ（現京都シネマの前身）の社長神谷雅子さんにご尽力頂いた。第 3 に「アジアの文化祭典」の企画の一つとして韓国全南長城の中高生からなる農楽班 10 数名を招き、サムルノリやパンソリを上演してもらったのだが、これには多くの方々の理解と協力があった。まず西村清次さん（元立命館理事長）の紹介でパチンコ業界の雄高山物産に後援を頂き、次いで京都韓国学園（現京都国際学園）に招待すべき楽団の選定と交渉をお願いした。当時の事務局長西田晴彦さんと共に市内を行脚したが、2006 年に倒産した高山物産が楽団の渡航費や宿泊代などすべてを無条件に出してくれた。その太っ腹と、パンソリを演じた女の子の悲哀に満ちた唄声を、今もしみじみと思い出す。

第 4 に、「アジアの文化祭典」の企画全体を通して、ボランティアとして登場した学生たちが獅子奮迅の活躍をした。以学館前の広場全体を祭典空間として位置付けて適所に竹を配し、民族料理店などで雰囲気を作り上



げたのだが、そのために山科の芝田徳造先生宅の竹を数十本切り出すことをはじめ、舞台装置づくりや照明のあて方、当日の運営・演出など、大きいことにも小さいことにも気を配る見事な采配を振るっていた。委員長格だった高橋聡、副委員長格だった海老野充範、美術の吉田颯、光の鏡原正行ほか 10 数名、毎日一仕事終わったら韓国家庭料理の店味峰（ミホ）に集まって、濁酒で気合を上げていた。私が今でもミホに行くのは、その時以来の付き合いがあるからであり、祭典当日ミホもまたチヂミを焼き学生の弁当を用意してくれたからである。こんな学生たちに会えて幸せであった。

第 5 に、記念式典に先駆けて記念レセプションを都ホテルで開いたが、その時圧巻だったのは 4 回生の伍芳さんの奏でる古箏であった。当日京大の社会学を代表して来られた高橋三郎さんは立命産社の文化的豊かさに心からの敬意を表しておられた。

以上、30 周年記念事業に関わって忘れられないことどもである。企画全体に関わっては朝日広告の文化部長、光武英樹さんの世話になった。合わせて御礼申し上げたい。

産業社会学部創立30周年記念行事

さんしゃデイ特別企画「アジアの文化祭典」



名誉教授 吉田 昌子

産業社会学部（以下産社とします）の創立時は、全国の大学が学園紛争に巻き込まれていくという、未曾有の社会動乱期にありました。随分苦労があったのですが、30周年を迎える頃には、充実と発展が約束される安定期に入っていました。創立30周年の記念行事に向けて産社が発信したメッセージをご覧ください。

The novel design of learning — さらなる発展の表徴

1965年、社会学を始めとする諸科学を糾合し、全国でも有数の学際的な学部として誕生した立命館大学産業社会学部。常に人と時代を見つめたフレキシブルな教学体系を構築し、その先進性と多様性から数々の実績と成果を社会に示してきました。そして、ことし。産業社会学部は、学部創立30周年という記念すべき年を迎えるにあたり、より広く社会に開かれた学問研究の場としての発展を志し、新しい時代の諸課題にチャレンジしたいと思います。人と社会が交響する、豊かな未来に向かって——。

いま、新たな出発の時を迎え、さらなる飛躍に挑む産業社会学部にごきたいください。

（30周年記念行事委員会のパンフレット「まえがき」より）

メッセージにあるように、「より広く社会に開かれた学問研究の場」と「人と社会が交響する、豊かな未来に向かって——」をうけて、記念行事の企画と実施の役割がわたしのところに回って来たのでした。

産社スタッフの一員で、文系のわたしがすぐさま思いついたのは、文化的な何か、そして学生を主体にしたもの、でした。その背景には、大学の国際化、留学生制度の採択がすでに始まっていて、1991年度から1995年度の産社正規留学生の数は、記録によると、171名になっていました。ほとんどがアジアからの学生でしたが、学生同士の文化交流を行ってみてはどうかと、留学生や日本人学生のサークルに呼びかけたところ即座に反応があり、

出演してくれる学生、会場を飾りつけてくれる学生、模擬店を考えてくれる学生が集まりまして、実施に向けての準備が着々と進み始めました。

ちなみに、その時の記念の行事すべてをパンフレットから紹介しましょう。

<p>記念公演会 10月1～3日(土～月) 「美のフィールドワーク:アジアの身体性」会場:以学館2号 10月1日「世の中心を」1時30分～ 2日「社会と芸術」1時30分～ 3日「異文化との交流」10時45分～</p>	<p>記念シンポジウム 11月17日(木) 「大学生からみた京都の未来像」会場:アカデミア立会2 1時30分～5時00分 * 京都1200年記念行事の協賛企画</p>
<p>記念講演会 10月7日(金) 「映画と講演の夕べー崔洋一監督を囲んで」会場:以学館ホール 4時30分 映画「月曜はどっかに出ている」 6時30分 講演「映画のリアリティ」(収録)</p> 	<p>記念レセプション 11月19日(土) 5時開演(4時30分開演) 会場:都ホテル(唐橋の側)</p>
<p>さんしゃテイ特別企画 11月3日(木) 「アジアの文化祭典」会場:以学館ホール、以学館前広場 10時～12時 専門学校専攻生による和太鼓、手鼓コーラス、西山千五郎社中少年隊による狂言など 1時～3時 学生・留学生による人形劇、仮面舞臺、演劇など 3時～5時 京都の宇堂寺六波羅弘願心、韓国サムルノリなど * 京都1200年記念行事の協賛企画</p>	<p>記念式典及び記念パーティーなど 11月20日(日) 11時30分 産社校学生会会および10周年式典 会場:以学館2号 1時00分 学園創設30周年記念式典 会場:以学館ホール 2時30分 学園創設30周年記念パーティー 会場:体育館</p> <p>記念出版「産業社会学部30年誌」発行 「立命館産業社会論集:創立30周年記念特集」発行</p> <p>教育・研究資金の募集 学部学生のための教育・研究資金の募集、学部奨学金の創設</p>

限られた紙数のため、ここでは「文化祭典」の内容を詳しく述べることは出来ませんが、このプログラムを組んだ趣旨を述べておきたいと思えます。

- 第1に 産社の学生・留学生が中心となること
- 第2に 外部から招へいする場合、青少年であること
- 第3に プロフェッショナルな劇団などは呼ばない
- 第4に 演目、世代などで対照的な内容を考えること

この年の半ば頃に、京都文化芸術会館で、衣笠にある府立豊学校の寄宿生たちの和太鼓演奏の公演がありました。同じ地域にありながら、特殊学校のために他の学校とほとんど交流を持たないこの人たちにも同じ若者として参加してもらえないだろうか、と思い提案しました。実行委員の間に多少の危惧がありましたが、スタッフの木津川計先生が、狂言の少年隊を呼ぶことで学外青少年の部として成立しました。

学生の部では、サークルの学生たちは日頃の活動の成果を発表。それに対し、驚いたことに、韓国、台湾からの留学生が、わざわざ本国まで行って、わたしたちの知らない芸能を持ちかえり披露してくれたことでした。

最後に思いついたのは、京都の伝統的な民間芸能である「六斎念仏踊り」でした。宗教的な行事ですが、京都市民の間で継承されてきている、いわば地藏盆行事のような一般の人たちの営みです。それならば、と出てきたのが、韓国の伝統的な農民芸能である「サムルノリ」でした。これですべてのお膳立てが整い、思いがけない盛り沢山の中身が出来上がりました。

「アジアの文化祭典」のプログラムから「あいさつ」と「演目」を引用します。それによって以上の趣旨をご確認ください。



ごあいさつ

立命館大学産業社会学部創立30周年を祝うシンポジウム、講演会など学問的な企画のなかで、私たちは、広く人びとに楽しんでもらいたくしながら、本学部の教育の一端を知ってもらえる行事として、「アジアの文化祭典」を企画いたしました。

欧米諸国の場合と比べて、その活動を見ていただく機会の少ないアジアの留学生の活躍ぶり、また障害をもった少年たちの生き生きと活躍する姿を、ご覧になっていただきたいと願っています。

伝統芸能のアロの方々の賛助出演も得て、多岐で豊かな内容となりました。この祭典を、屋外に開催しました「アジアの緑日」ともご心づくまでお楽しみください。

立命館大学産業社会学部創立30周年記念事業特別委員会
さんしやダイ企画委員会 一同

最後に、催しに関連する、当時のスタッフ（敬称略）を紹介します。

- 学部執行部：**佐藤嘉一（学部長） 木田融男（学部主事） 桧原美恵（学生主事）
篠田武司（大学院委員・主事） [西田晴彦（事務長）]
- 企画・実行：**吉田昌子 古山正 **事務局：**佐々木嬉代三 西田晴彦
- 会場係：**長崎孝 杉浦文治 多和田堅 **駐車場係：**宮沢正男
- 控室係：**清水郁子 蒲田美和
- 司会者：**木津川計 中谷隆宏（RBC） 吉田昌子

なお、事務局の佐々木嬉代三先生は、学生スタッフの援護、外部団体との渉外に大活躍でした。その活躍ぶりと多数の学生スタッフに関しては、佐々木談話と併せお読みいただくことを望みます。

産業社会学部 50 周年
学術企画実施予定紹介

< 一覧 >

学術企画

	代表者	メンバー	内 容	実施時期
1	高嶋正晴	高嶋、景井、 中西(典)	映画『産土（うぶすな）』上映会と監督ティーチイン ～農山村地域の今、そして未来を考える @朱雀キャンパス 1階多目的室 1・2	2015 年 11月7日(土)
2	遠藤保子	遠藤	ガーナ国立舞踊団招聘・研究企画 @以学館 1号ホール	2015 年 11月19日(木)
3	黒田 学	黒田、市井、 津止	社会学研究科修了（産業社会学部卒業含む）の研究者 による学術シンポジウム ～さんしゃ教学 50 年と研究者の養成～ @清心館 4階	2015 年 12月6日(日)
4	山本耕平	山本、峰岸、 丸山	韓日交流シンポジウム「若者の『家出』と増加する若 者ホームレスの生活及び支援に関する研究」 @創思館カンファレンスルーム	2016 年 1月16日(土) 17日(日)
5	金山 勉	金山、柳澤、 坂田	日韓の高等教育におけるメディア教学の課題とこれ から	2016 年 1 月

学術出版

	代表者	メンバー	内 容
1	松田亮三	松田、鎮目、深澤、加藤（非常勤）	社会保障の公私ミックス・グローバル化の中の変容
2	筒井淳也	大学院 GP 科目「応用社会学特殊講義 C」 関連の先生（日韓中心に）	東アジアの後期資本主義と格差
4	櫻井純理	櫻井、大野、吉田、江口、唐鎌ほか	産業社会学部における産業・労働研究の軌跡と発展
5	日暮雅夫	日暮、江口、栗谷、市井、住家、 尾場瀬（非常勤）ほか	現代社会理論からの挑戦～承認・ヘゲモニー・文化・ レギュレーション・宗教～
6	浪田陽子	メディア社会専攻教員	メディア・リテラシーをコアとしたメディア研究の眺望

※ミネルヴァ書房より 2015 年度中に刊行